

八幡平前森山地区畜産クラスター協議会

I 概要・経緯

岩手県北西部、安比高原スキー場で知られている前森山の東山麓で展開しているのが八幡平前森山地区畜産クラスター協議会である。構成員の株式会社前森山集団農場が中心的経営体として岩手花平農業協同組合、新田家畜管理サービス、岩手山麓デイリーサポート、八幡平市、八幡平農業改良普及センター、盛岡地方振興局で畜産クラスター協議会を形成している。

前森山集団農場は、昭和 29 年に中国（旧満州）から帰還した開拓団、開拓義勇隊の先代たちが集団農場を立ち上げるため現在地に入植したことに始まる。以来、酪農業を主に規模拡大を図り、平成 27 年 3 月の協議会設立時点の飼養規模は経産牛 200 頭、育成牛 200 頭の生産が行われてきた。経営概況は役員 4 名（代表取締役 寺地輝美氏）、雇用職員 7 名（常勤 5 名、臨時 2 名）、耕地は牧草地 137ha、飼料畑 35ha、年間出荷乳量は 1,972t で飼養システムはフリーストール、ミルクキングパーラーを備えている。

畜産クラスター事業を活用するきっかけは、資材、購入飼料費の高騰に対して粗飼料基盤を有効に活用した生産のための基盤を整えるとともに、役員・常勤職員の高齢化から、将来を見据えたとき現在 20～30 歳代の後継者 2 名への負担をいかに少なくするかという課題があった。さらに、これまで牛舎は搾乳、分娩乾乳、育成、哺育が個別に配置されていて、担当職員が協力し合って効率的な業務をするには作業動線が悪く省力化が難しかった。今回の調査時は思いがけない豪雪に遭遇したが、冬季の牛舎間を移動することがいかにままならなかったことをつぶさに感じる事ができた。

II 取り組みの目標、目的、目指したもの

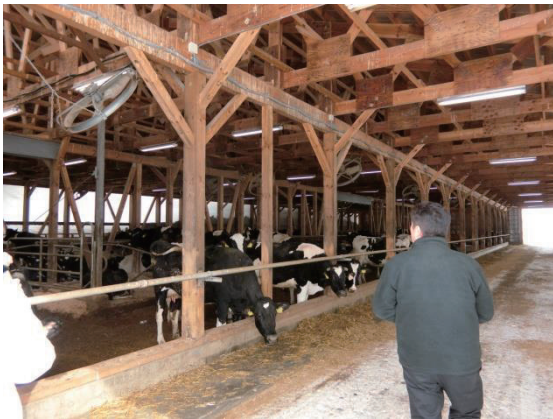
飼養頭数は畜産クラスター設立時、経産牛 200 頭、育成牛 200 頭（平成 27 年 3 月）から現在は経産牛 252 頭、育成牛 260 頭（平成 30 年 2 月）まで着実な増頭が行われていた。牛舎の施設整備に合わせて最終的に経産牛 350 頭、育成牛 330 頭の飼養規模にすることを目標にしている。

牛舎整備は、搾乳牛舎 964 m²、分娩乾乳牛舎 974 m²及び搾乳パーラー施設（改修）はすでに供用が始まっていて、これらが連結しているため積雪期の作業性を含めて動線の改善につながっていることを実感することができた。

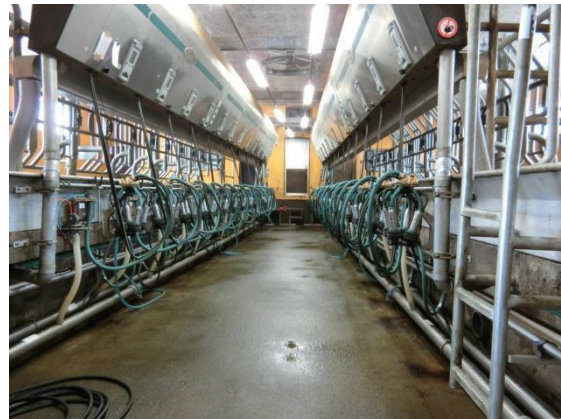


【写真1 管理棟、奥:分娩乾乳牛舎、右:搾乳室
(右・寺地代表取締役)】

牛群システム管理プログラム導入は、構成員である酪農場専門のコンサルタント獣医師である新田家畜管理サービスによって行われており、新牛舎の供用後の牛群管理は緻密に行われている。乳量は初産牛の割合が多いこともあり、伸び悩んでいるが、経産牛平均 9,000kg 搾乳の目標に向けて生乳生産量の増加が期待される。



【写真2 整備されたフリーストール牛舎】



【写真3 改修した搾乳パーラー】

自給飼料生産では、草地・飼料畑の有効活用と単収増を目指して機械の導入、傾斜地圃場に対応するためGPSによる作業の効率化に取り組んでいる。平成27年度から県畜産研究所と連携した簡易更新、飼料用トウモロコシ生産で収量減の要因の1つである強害雑草アレチウリの防除を不耕起播種技術と薬剤処理を組み合わせた技術導入をはかり増収に結びつけている。飼料用トウモロコシの生産は山の中の圃場33haで取り組んでいて更に作付拡大したいところであるが、当地はツキノワグマによる食害被害が頻発している所であり二の足を踏んでいた。作付拡大に向けて、牧場は八幡平農業改良普及センターと連携してこ

れまでの簡易電気柵を講じてきたが、それでもクマの侵入被害があったことから支柱とワイヤーの強度を高めた恒久電気柵を設置し、侵入被害の軽減に結びつけている。中心的経営体とクラスター構成員が課題に即応した連携が図られている。

繁忙期の飼料生産は適期収穫が基本となるが、クラスター構成員である岩手山麓ディリーサポートとの連携作業で収穫の効率化の努力が行われている。岩手山麓ディリーサポートは、前森山農場から約10kmの岩手山北麓にある自給飼料型TMRセンター、コントラクターの機能を持つ農事組合法人である。こちらとの連携関係は牧草及び飼料用トウモロコシ生産、TMR調製技術の情報交流は大きな力になっていて、今後公共草地の活用と哺育部門の強化と性判別精液によるスモール、初妊牛供給元としての役割強化が期待される。

Ⅲ 組織・機構

(株)前森山集団農場が中心的経営体として代表取締役の寺地輝美氏が牽引している。構成員の新田家畜管理サービスは飼養管理、繁殖指導、家畜診療の分野で、岩手山麓ディリーサポートは飼料生産での連携のみならず、育成施設の設置を視野に今後、初任牛販売と乳用雌スモール販売に取り組むことが話し合われている。さらに、八幡平農業改良普及センター、県畜産研究所は、課題に対して的確な技術支援に関与されるなど、将来的に八幡平地区の酪農発展を目指した強固なクラスター形成が行われていて明瞭なベクトルに頼もしく思われた。

Ⅳ 収益性の向上に資する取り組み内容

採草地面積は132.5ha(平成27年)から136.9ha(平成27年)に増加している。これは簡易更新機による草地更新によるもので今後の収量安定化が期待できる。飼料生産原価(円/kg)の評価を牧草サイレージ、デントコーンサイレージ、ロールベールサイレージ、乾牧草ごとに行っており、平成27年と比べて平成29年は改善に向かっている。牧草サイレージの生産原価の一例を見ると、10.80円/kg(平成27年)、9.29円/kg(平成28年)、9.43円/kg(平成29年)と改善傾向に向かっており、GPS活用による施肥管理、クマ被害対策を講じたコーンサイレージ生産など取り組みの効果が生まれている。現在のところ粗飼料自給率100%の状態であるが、今後の増頭に向けて粗飼料基盤の確保による増収が必須の課題と思われた。

牛群管理（飼養・繁殖等）においても、個体管理データをもとに農場牛群の月別乳量・頭数の動態を把握し、乳牛部門職員と役員、構成員である新田家畜管理サービスが共有し事業計画の達成に向けた取り組みが行われている。

V 支援体制

定期的な成績検討、勉強会、研修会、先進地視察等が実施されている。飼養管理、繁殖診断、成績分析では新田家畜管理サービスによる隔週の指導が行われている。

経営分析では、「いわぎん事業創造キャピタル」による経営検討委員会の開催などによる経営の評価・分析が行われている。これは前森山集団農場が「いわぎん農業法人ファンド」から平成29年度に4,000万円の出資を受けたことによるもので、毎月財務、月次試算、資金計画、経営分析を含めて今後の課題検討が行われている。また顧問税理士による経営アドバイスも入っていることなど多角的な検証シフトが形成されていた。

技術支援では先に述べたとおり、八幡平農業改良普及センターや県畜産研究所等による施肥設計、不耕起栽培による除草対策の研修と実地指導を受けている。

VI 情報交流

現在、前森山集団農場が会長を務め、県下30戸の酪農家が自主運営している岩手県フリーストール・フリーバーン酪農研究会に参加し、TMR飼料の低コスト化や蹄病対策などフリーストール飼養に必要な技術研鑽に務めている。このなかで先進地視察、酪農技術の研修など外に向けた活動も大切にしている。教育ファームの活動では、盛岡中央高校のフィールドワークを受け入れ、農場で実施しているICTを活用した農業紹介として牛群管理システムによる飼養管理、GPSによる圃場管理や収穫作業などの岩手県の基幹産業である草地型酪農の最新技術を次世代に伝えているなど幅広い情報交流が頼もしく思われた。

VII 地域への波及効果

畜産クラスター事業の開始は、八幡平地区の酪農関係者・組織に多大な波及効果が生まれていることが感じられた。八幡平地区公共牧野を活用した育成牛生産を行う計画、岩手山麓ディリーサポートと連携した粗飼料生産など、これまで取り組めなかったことが着実に動き出している。

VIII まとめ

八幡平地区の草地資源を有効活用した草地型酪農経営の規模拡大を目指した優良事例である。協議会では以下の3つの柱で取り組まれている。

- (1) 自給粗飼料生産による飼料コストの低減：機械導入による作業効率向上と良質粗飼料生産技術の向上
- (2) 自家育成による増頭計画：施設増設、整備による畜舎施設の集約
- (3) 性判別精液による乳用雌牛の生産販売：受胎率の向上、飼養管理技術
(吉田 宣夫)